

# 奄美の黒糖騒動史の

## 世界を描いた郷土作家

略歴

大正十年三月十一日

大島郡徳之島町徳和瀬に生まれる。

昭和二十六年

第一作「奄美大島脱出記」を発表

昭和五十二年四月

本格的に作家活動をはじめる

前田 長英

作品紹介

「潮鳴島」

「薩摩藩庄政物語——徳之島町前緑帳の世界——」

「黒糖騒動記」

「女神たちの黄昏——翳島譜——」

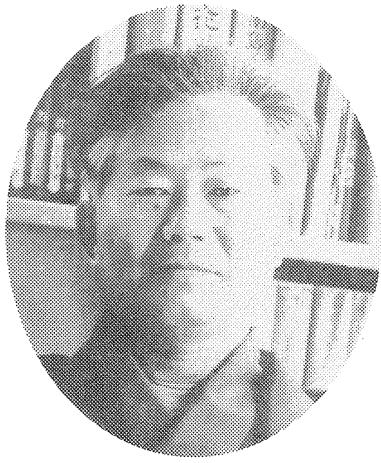
「道之島史論」

「黒糖悲歌の奄美」

「徳之島の昔話」

平成三年十月

七十歳で永眠する。



## 生い立ち

大正十年三月十一日、大島郡徳之島町徳和瀬で前田長英は生まれました。

そのころの徳和瀬は、約百二十戸の小さい集落で、農業だけで生活していました。台風が襲つてくると、大事に育てた作物が根こそぎ倒されることがたびたびありました。こんなとき集落の人たちは、海や山へ行つて食べ物を求めてきました。特に、海へ行けばさんご礁の干瀬（干潮になると浮上する石の世界）があつて、そこには魚や貝類や海藻類がたくさん生息していましたので餓死するようなことはありませんでした。当時の島の人たちはすべてが大自然の恵みによつて生かされていました。長英もこのような社会の中で幼年期を過ごしたのでした。

当時はテレビやラジオがまだ徳和瀬にはありませんでした。幼い子どもたちにとつての楽しみは、「もの知り」と呼ばれるお年寄りが子どもたちに昔話をして聞かせたり、口説（物語りうた）を歌つて聞かせたりしてくれることでした。それを知つていた子どもたちは夕暮れどきになると一目散に自分のひいきの古老の家へと走つていきました。長英の父親道武も集落では最も優れた昔話の語り手だったので、夕方になると、隣り近所の子どもたちが大勢集まつてきました。テレビもラジオもない時代のことですから、その昔話のイメージが子どもたちの心の中

に大きな夢を描いていきました。

長英は、神之嶺小学校を卒業し、大阪で中学校（現在の普通高校）に行くために、みんなと一足早い別れを迎えることになりました。長英は、このときすでに「自分は将来、世のため、人のために役立つ作家になりたい。」と心に決めていました。

## 大阪への旅立ち

昭和八年（一九三三）四月、長英は大阪の市岡中学校（現在の市岡高校）に無事入学しました。長英は、ただひたすらに学業に打ち込みました。「大阪の生徒たちに負けてはならない。」という根性を持つていきましたので、飽きることなく勉強に集中することができました。その結果、学校での成績はいつも上位に食い込むことができました。

昭和十二年（一九三七）に、日本はついに中華民国と戦争をすることになりました。戦争になればその国的一大事ですから、国民あげて勝つために協力しなければなりません。その協力を押し進めるためにつくられたのが「国家総動員法」という法律です。この法律は次の年の昭和十三年四月一日に公布されました。この法律によつて、日本の政治、経済、教育はもちろんのこと、国民の日常生活までもが戦争に勝つために協力させられるようになつていきました。

そんな雲行きの昭和十三年三月に長英は、市岡中学校を優秀な成績で卒業し、翌四月には関西地方の名門、関西大学の予科（現在の関西大学）に入学しました。作家になりたいという希望を持つていましたから、文学部に席をおきました。希望に燃え、胸をふくらませての進学でした。このとき長英は満十八歳。心身ともに屈強な青年に成長していました。そこで、長英は、学問というものの奥行きの深さをひしひしと感じさせられました。そんな科目の中で特に关心を引きつけたのは上代文学（古事記、日本書紀、万葉集など）でした。なぜかと言えば、日本書紀には古い時代の大和朝廷と南島（種子島、屋久島、奄美、徳之島など）との係わり合いが記されていました。次にその例を示してみます。

「文武天皇三年（六九九）秋七月、種子、屋久、奄美、徳之島の人たちが来て貢物を献じたので、位を授けた。位にはそれぞれ差があつた。<sup>とく</sup>その度感島がこの国に通じたのは、これが初めてである。」

右の記録はいまから千三百年前のものです。日本書紀という古い記録には主に天皇の行つた大和朝廷時代の仕事の様子が記されているのですが、その中に南島とのかかわり合いのことも数多く登場してきます。その中の一片を右に示してみました。千三百年前のことですから、その当時の南島の記録は、島側には何ひとつ残されていません。だから、大変貴重なものです。徳之島出身の長英が歴史への夢をかり立てられたのも当然のことでした。

ところが、月日の流れは無惨です。昭和十五年（一九四〇）の夏に吹いた台風によつて故郷徳之島の農作物が大被害を受けてしまいました。台風銀座と呼ばれるこの地域は、毎年きまつたように台風が襲つてくるのですが、この年の台風は、また格別でした。現金収入源のさうきびも常食としている甘譜かんしょもみんな打ちひしがれてしましました。ついに長英への送金ができなくなつてしまつたのです。「島がたいへんだ。」ということで、長男の満広も島へ引き上げていきました。長英は一人取り残されてしまいました。「さあ、どうしようか。」と迷つているとき、父道武からは「もうどうしようもないから、学業を捨てて島に帰つて来い。」という連絡がきました。しかし、長英は島に帰る気は起こりませんでした。「学業だけはどんなことがあっても続けたい。」と決心したからです。

それから長英は、昼は大学へ通い、夜は仕事へ出て働くという、自分で稼いだお金で学費をまかなう生活になつてしまつたのです。ところが、そんな生活が長続きするはずがありません。食うや食わざの生活が続いた後に、大学へ納める授業料を得るために、自分の血を病院へ売るということまでするようになりました。次第に体力が弱つていきました。もう学業どころではありません。ついに、昭和十六年三月、関西大学（予科）を二年間で終了して中途退学、故郷徳之島へ帰ることになりました。

## 故郷徳之島へ帰る

昭和十六年（一九四一）四月、長英は、七年ぶりに徳之島の亀徳港に下り立ちました。このとき長英は満二十歳。こころざしなか志半ばにして島に戻つてきただことに悔し涙を流しました。一方、事前に連絡を受けていた父道武や親戚一同は、今か今かと早くから港で待ち構えていたのですが、長英の姿を見た瞬間、ためいきを飲み込みました。長英の顔が青白く、しかもやせおとろえていたからです。しかし、長英の表情は明るく、久しぶりに戻つてきた故郷に安堵あんどしていました。

主食はまだ甘藷かんじょとヤンブイバン粥かゆに蘇そ鉄てつの実のの澱粉でんぶんを混入したものでした。が、徳之島の大自然の恵みによつて、長英の健康も日毎に回復していきました。

体力が大分ついてきたので、長英は読書に熱中することにしました。せつかく島に帰つてきたのだからと、今度は郷土資料（島の歴史や文化のこと書いた本）を読むことにしました。いろいろな郷土資料を読みましたが、特に次の本が長英の心を強く打ちました。

①徳之島前録帳（薩摩藩時代に代官役所でつけられていた公的記録。古文書。）

②南島雜話（奄美大島に遠島された名越左源太という人の書いた絵入りの日記。徳之島事情）

（明治二十八年、吉満義志信という人の書いた徳之島の歴史と文化、地理などの解説書。）

③奄美民謡大観（昭和八年、文英吉という人の書いたシマウタの解説書。）

これらの郷土資料に書かれていることが、後に小説を書くときの長英の基礎知識として大いに役立ちました。

ここで当時の時局（国の内外の事情）についても少々触れておきましょう。

盧溝橋事件ろこうきょうじ（昭和十二年）が元で始まつた中国との戦争は、ついに全面戦争へと発展していきました。日本は国をあげて戦争に勝つための組織づくりにのめりこんでいきます。そして、ついに日本はアメリカやイギリスなど諸外国とも戦争をするようになりました。いわゆる太平洋戦争の始まりです。若い青年たちは戦争に出征したために働き手が少なくなり、国民は貧しい生活を強いられることになりました。それでも国民は我慢して戦争に勝つために一生懸命に働きました。

開戦当初は全戦連勝だつたのですが、昭和十八年ごろから日本軍はあちこちで負け始め、昭和二十年の夏、広島と長崎に原子爆弾が投下されたのを機に、日本はついに無条件降伏をしました。何もかも投げ出して取り組んだ戦争だつただけに日本国民が悔し涙を流しました。

長英も悔し涙を流しましたが、しかし、長英には日本に新しい時代の波が押し寄せてくることが読んでとれました。その新しい時代に備えるために、「もう一度大学で勉強をやり直そう！」と心に決めたのです。

## 奄美諸島はアメリカの軍政下に

ぐんせいいか

ところが、時の流れは予期しない逆の方向に進んでいきました。翌昭和二十一年の二月二日にアメリカから一方的に押し付けられた文書によつて、奄美群島は沖縄諸島と共に祖国日本から切り離されてアメリカ軍の直接統治を受ける軍政下になつたのです。歴史始まつて以来の異民族支配です。しかし、無条件降伏をした日本にそれを断ることはできませんでした。宣言文にはおよそ次のように書かれていました。

(1) 北緯三十度以南の大島郡は鹿児島県から切り離す。ただし、法律は旧慣のまま適用する。

(2) 通貨は軍票を使用し、公務員の給料は軍政府が支給、食料も軍政府が支給する。

(3) 大島郡は沖縄の支配下には置かない。大島郡自らが政治をとる。

この宣言をラジオで聞いて人々はびっくりしました。戦争に負けて身も心も打ちひしがれて苦悩しているときには、母国日本から切り離された上に、アメリカの軍部に統治されるという、この運命の悲しさ。「まるで袋の中のねずみのようだ。」と人々は嘆きました。

しかし、長英は弱気になりませんでした。青年団を中心にして島おこし活動を開始しようと決意を新たにしたのです。長英は徳和瀬集落の青年団長の地位にあつたので、次のような方針

を打ち出しました。

(1) 自分たちで娯楽を作り出すこと。

(2) 島の歴史や産業について学習すること。

(3) 島の将来について論ずる弁論大会をもつこと。

右の提案に対し青年たちも両手を上げて賛同し、長英に従いました。長英は娯楽作りのために自ら演劇の台詞を書き、また、島の歴史学習にあたっては、自らが講師となつて講義をしました。中でも一番活発だったのは、弁論大会でした。青年達は、島の将来について思い思いの夢や希望を述べ合うのが常でした。この弁論大会はいつも活気があり、長英もみんなの意気の高さにはいつも感心させられていきました。

昭和二十一年三月、徳之島の中心地亀津で徳之島の連合青年団主催の弁論大会が開かれるという知らせが、長英のもとへ届きました。ここぞとばかりに長英は出場し、多数の聴衆を前にして雄弁を振るいました。長英は、異民族支配が歴史的、文化的にも不當であることや、本土との交通遮断によつて島の未来さえも奪い取ろうとしていることの不当を訴え、しめくくりとして「一日も早く祖国日本へ帰る以外に道はない。」と絶叫して場内から割れんばかりの拍手を浴びました。審査の結果、長英の弁論は第一位の優勝に輝き、長英の名は徳之島全島に知れわりました。

この長英の弁論について、徳之島町誌には、「徳之島における復帰運動は、前田長英の弁論によつて口火が切られた。」と記されています。およそ一時間の長英の弁論が当時の疲れ切つた世相に活力を与えたのですから、長英に対する世間の評価も高まつていきました。それから、復帰運動は奄美の全群島に拡大していくことになりますが、長英にはもう一つ夢がありました。

それは、本土に出て「もう一度大学で勉強したい。」という夢でした。奄美には大学がないので、本土に出なければなりません。しかし、奄美から本土に行くことは、アメリカの占領政策によつて禁じられているので船便がありません。さて、どうしたらよいのか！長英は夜も眠らないで考え続けました。そして思いついたのが「密航」でした。

## 密航で再び大阪へ

密航とは、ときの法律を無視して密かに航海して目的地へ行くことです。長英に密航を決意させたのは、ただ「祖国日本で勉強したい。」という執念でした。このとき長英は満二十七歳。若いときだけしか勉強はできない、という思いが長英を密航という危険な行動に身を押し出したのです。そして、昭和二十三年の春一月下旬の旧正月の日に長英は島への思いを抱きながら密航船に乗り込みました。旧正月を選んだのは、監視の目を逃れるためです。船は十五トンほ

どの木造船でした。だからよく揺れました。こんな危険な船で名瀬——屋久島を経由して七日目に鹿児島に着きました。それから休む間もなく汽車で大阪へと向かいました。

出版社に仕事を見つけると四月には、京都の立命館大学の史学科に入学しました。昼間は出版社で翻訳事業（英語を日本語に訳す仕事）をするので、夜間部に入りました。こうして長英もようやく落ちつきを取り戻しました。二度目の大阪暮らしもようやく軌道に乗ってきたのです。そして、昭和二十六年、図書館に勤務していた徳之島出身の福井磯子さんと結婚しました。

ところが運悪く、長英は今度は肺結核にかかりてしまいました。もう学業どころではあります。立命館大学は二ヵ年で退学することになりました。京都の療養所で入院生活を送ることになつたからです。しかし、入院中も長英は時間を持てあますことはありませんでした。今度は全国文芸誌の「小説葦」という本に「奄美大島脱出記」という小説を書いてみんなをあつと驚かしたのです。この小説は密航の体験をつぶさにつづったものですが、この作品が長英の一番目の作品になりました。この年には長男も生まれ、長英は貧しく、病弱ながらもなんとか幸せな生活を送っていました。

昭和二十八年十二月二十五日（クリスマスの日）を期して、奄美諸島は晴れて八年振りに祖国日本に復帰することができたのでした。

もう奄美と大阪の間には何ひとつ障害はありません。個人の意思によつて自由に往来するこ

とができるようになりました。長英の夢も故郷徳之島へ飛んでいくことが多くなつていきました。「大自然の恵みの豊かな島、人情の豊かな島」でもう一度落ち着いた生活をしてみたい、と思うようになつたのです。

## 安住の地を求めて故郷徳之島へ

昭和三十三年の夏、長英は幼い子ども二人を連れて徳之島に帰つてきました。長英は、昭和三十六年に島の製糖会社に就職することになりました。製糖業は島の基幹産業だつたので、国や町からの保護助成があり、しかも島の住民の生活を支える産業だつたので、長英も農家の側に立つて懸命に振興策に取り組みました。

また、一方では郷土資料等によつて島の製糖業の歴史についても研究を重ねていきました。以前読んだことのあつた前録帳（薩摩藩時代の役所でつけられていた日誌）や大島代官記（大島本島の薩摩藩時代の役所の日誌）などを徹底的に読んでみたのです。そして、江戸時代末期に私たちの先祖が藩の強制的な黒糖の買い上げによつて、たいへん苦しめられていたことを知り、愕がく（ひどく驚くこと）としました。このとき、長英の頭の中には一つのひらめきが舞い上りました。それは、「この前録帳の記録の裏に潜んでいる島の農民たちの生きざまを小説

にしてみよう。」というものでした。それ以来、長英は鹿児島県史や大奄美史（昇曙夢著）昭和二十四年刊など歴史書なども丹念に読み、知識を貯えていました。そして、十六年間の会社勤めを定年で退職した昭和五十二年四月から本格的な作家活動に入つていきました。脇目も振らずにただ一念、執筆に打ち込む長英の姿には周囲の人たちから溜息が漏れる程でした。そのようにして書かれた長英の作品は小説や昔話集や歴史書、論文などの多数に及びました。

次にそのうちから、七冊を選んで紹介することにしたいと思います。

① 「潮鳴島（しゅなりじま 昭和五十一年 兵庫県芦屋市南島新聞社刊）

琉球王朝時代（およそ五〇〇年前）に徳之島町に住んでいたという豪族たちの争いを小説化されたものです。

② 「薩摩藩政物語－徳之島前録帳の世界－」（昭和五十六年 東京JCA出版社刊）

徳之島前録帳という薩摩藩時代に書かれた古記録に記された内容からすくい上げられた当時の農民の生きざまを小説化したものです。「黒糖地獄」と呼ばれた奄美の歴史の暗黒部分が描かれています。

③ 「黒糖験動記」（昭和五十八年 大阪海風社刊）

明治時代になると、民間の商社が金銭の力にものを言わせて黒糖取り引きを一手ににぎり、農家を苦しめるようになります。それを見かねた丸田南里（まるたなんり）（名瀬出身で英國帰り）という青

年が解放運動に立ち上がり、奮闘する物語です。

④ 「女神たちの黄昏—鶴島譜—」

琉球王朝時代に島々の宗教を一身に背負つて人々の心の拠りどころとされていた宗教組織の女祭司ノロたちが薩摩藩の弾圧によつて宗教活動が出来なくなり、そのためには人々は心の支えを失い、ついには奄美人らしさも失くしていく様を描いています。

⑤ 「道之島史論」（平成三年 大島郡住用村の財団法人 奄美文化財団刊）

「徳之島新聞」という地方新聞に連載された「奄美の歴史を考える」というコラム（短い論評）を集大成した本です。

⑥ 「黒糖悲歌の奄美（昭和五十九年 鹿児島市の著作社刊）

「鹿児島の歴史シリーズ（5）」として刊行された本です。慶長十年（一六〇五）から明治五年（一八七二）までの二六一年間に及ぶ奄美の黒糖にからむ歴史が分かり易い文章で述べられています。

⑦ 「徳之島の昔話」（平成六年 鹿児島市の著作社刊）

長英が島の古老や父道武から幼いころに聞いた昔話四十話がやさしい文章で語られています。長英はこの昔話のこころを胸に染みこませて、苦しいときの心の支えにしていましたそうです。昔話を通して私たちは先祖たちの想像力の豊かさや心の優しさなどを知ることができます。

す。

ところが昭和六十一年の冬のころから長英は「心臓がおかしい。」と訴えるようになりました。無理がたたつたのです。それでも責任感の強い長英は書き続けました。このような長英の努力に対して、地元の南海日々新聞社は、教育文化部門の功労者として昭和六十年度の「南海文化賞」を授与しました。その後、長英は悪化した心臓病を治療するために、鹿児島市や京都市の病院を転々としましたが、回復することができず、平成三年十月、ついに帰らぬ人となりました。享年七十歳でした。

執筆者 松山光秀